

ロバート・グリーン作 「ジェームス4世」について

小林 絢子

先回に引き続いて英国チューダー朝のドラマを読んでみる。シェイクスピア前期に活躍したいわゆる「大学才子」(university wits) の一人ロバート・グリーン(Robert Greene c.1558-1592) による「ジェームス4世」(*The Scottish History of James IV*)である。¹⁾グリーンを含む大学才子達(Thomas Lodge 1558-1625; Christopher Marlowe 1564-1593; Thomas Nashe 1567-1601 等)は時間的空間的に自由な発想で劇作をし、いわゆる closet plays の土壌を作ったといわれる。彼らはきらびやかなラテン語直輸入の言葉や表現を使い、パンフレットや詩作においてもユーモアや機知を縦横無尽に使ってその前の時代にイタリアやフランスではやった物語や詩を改作、拡充して英語の語彙や表現の豊富化に寄与した。劇に改変したものも勿論多い。今回はその中で、詩論や詩篇でなく、劇作を例として英語の発展の華やかな1ステージを読み解いていきたい。

グリーンは標題の作品の他にもさまざまな劇やパンフレットの散文、諷刺詩、自伝等を書いている。中でも *Greene's Mourning Garment* (1590), *Francesco's Fortunes* (1591), *Greene's Vision* (1592), *Greene's Groatsworth of Wit* (1592), *Friar Bacon and Friar Bungay* (1594), *Orlando Furioso* が有名である。標題の「ジェームス4世」は1594年に劇として登録されたが、現存する最古の印刷本は1598年のQuarto版といわれる。

この劇の源はG.B.Giraldi Cinthiaの *Hecatombnithi* という作品で、これは1527年の「ローマの略奪」を逃れてマルセイユに向けて航海していた10

人の男女が話を合計100話行うという、ポピュラーな物語形式をとったものであるが、その第31番目の話²⁾が原本といわれている。主な構図は君主と王妃と部下の妻という三角関係でこれもよくある筋立てであった。パラサイトや同調者の配置やウィットが作者の腕の見せ所であったのである。この劇の主人公のジェームス4世と実在のスコットランドの同名の君主(1473～1513)の関係についていうと、劇中の王は利己心が強く、身勝手に浮気ものであるが、本物のジェームス4世はgallantryで知られ、英国に侵入しようとしたり、Perkin Warbeckの乱(1495-7)を支援したりした。そのような政治的軍事的なことは劇中では重きをおかれていない。この王の在位時代から2世代を経たグリーン¹⁾の時代にあってはスコットランドのメアリー女王が処刑され(1587)、まだジェームス6世は即位しておらず、スコットランドに対するイングランド人の猜疑心や警戒心が強かった。それでグリーンは浮気心の強い王の例としてLady Margaret Drammondと浮気していたジェームス4世をモデルにしたのかもしれない。また、スコットランドの宮廷には居候やおべっか使いが跋扈していたという噂もあったので、これをグリーンが取り入れたともいわれている。

いずれにせよこの劇はHistoryではなくStoryである。この時代はhistoryは*Comical Historie of Alphonsus, King of Arragon*や*Historie of Orlando Furioso*等とも書かれるように「物語」(一連の事件の羅列)の意味であった。それからスコットランド方言の有無という点ではNorman Sanders版では現代つづりに直しているせいかあまり見当たらない。北方方言ではwh-をqu-と表してもよいところなのにBohanにwhayet(=quiet)と言わせたり(I-i-5), Be God, and sall(=shall)している、とChueton Collinsは指摘している。

次にこの劇に出てくる人物、即ち主人公であるジェームス4世と王妃の性質や立場をみてみよう。この劇のテーマである、君主が臣下の女性へ横恋慕するということと、それに付随して起こる正妻の屈辱、忍耐という設定はこの時代の劇にしばしば登場した。(同じくグリーン作の*Orlando Furioso*

(1516)の Angelica, *Alphonsus* の Iphigeniaもこの横恋慕に苦しんでいる。) 君主としてはジェームス4世はやや弱いというか、逡巡をする性質である。グリーンのアリフソスやChristopher Marloweの *Tamberlaine*³⁾のような独裁性にはやや乏しい。邪まな恋をする自分のことを "wretched king, thy nuptial-knot is death / For thy false heart / Misled by love, has made another choice (I-i-75-7)と責めている。そして王妃 Dorotheaの美点も "who is more fair and virtuous than thy wife?"と十分感じて vile lust that thus misleads us men I-i-166)と更に一般的な表現で自分の非を認めている。故に彼が自分の妻を消そうと決心するのはパラサイトである Ateukin にそそのかされてのことである。彼が王に自分の好色 (lust) からくる欲望を満たしても良いのだという一種の君主無誤謬性を吹き込むからである。彼はアリストテレスまで持ち出して王をそそのかす。「必要悪の中では最小限のものをえらべ」(IV-v-37 ff.)というのである。"It is no murder in a king / To end another's life to save his own / For you are not so common people be. (同上)と言う。すると王も "kings stoop not to every common thought (I-i-168)と呼応する。そうかといってこの王は Cambisis 王のような簡単な残虐さ、例えば判事の Sisamnis が部下を殺すときに "Do not entreat my grace, he shall die the death" (pp.934-36)と片付けてしまうような単純さはなく、そこがこの人物を複雑にしている所以であるが、それではこの複雑さ、彼の心の葛藤に我々が共感を感じないのはなぜであろうか。第一に彼の Ida への恋心があまりよく描かれていないことがあげられる。彼が Ida に求愛する場面は殆ど無く、第1幕で Ida の母 Countess of Arran が宮廷に暇を告げる時 "lovely Ida, is your mind the same?"ときき、Ida がそうだと答えると "then I see you set at naught / the force of love" というだけである。そして Ida をほめる言葉も専ら顔の美しさばかりで、beauty が 2 回 (beauty shines I-i-105; beauty shines I-i-116), fair が 3 回 (fair Ida とか fair face 同 129, 131; you are fair 同 105) とバラエティーがない。その内面の美しさ、例えば当時の婦人の徳目で

あった chastity, constancy, virtuousness 等という言葉は見当たらず、せいぜい coy (I.132) という修飾語が目新しいのみである。しかも王は王妃のことも fair と 3 回 (89, 129, 130) 言っているし、第 1 場では王妃に our love とか lovely Doll とかを 4 回、my life's light とか comfort of my soul とか呼びかけているので第 1 幕第 1 場が Ida への求愛の場であるとは到底考えにくい。それ以後も直接の求愛の場がないことは前述のとおりである。このような、恋愛の場面での語彙の少なさは、例えば Tamberlaine が Zenocrate に求愛する時の表現、"Zenocrate, lovelier than the love of Jove / Brighter than is the silver Rhodope, / Fairer than whitest snow of Scythian hills -- / Thy person is more worth to Tamberlaine, / Than the possession of the Persian crown, / which gracious stars have promised at my birth." に比べてもいかに貧弱で見劣りがするかわかるであろう。Tamberlaine もジェームス 4 世と同じように臣下から、"To be a king is half to be a god" とお世辞を言われて "A God is not so glorious as a king (II - v - 54~) と答えるほど傲慢なのに恋人の前では弱いという所が観客の共鳴をうるのに役立つのであろう。

王の心の葛藤への共感が乏しくなる第 2 の理由は、王が王妃を殺そうとする気持ちとそれをおさえる気持ちの間の逡巡が純粋に人間的な動機からというより、つまらない見栄や英国王の復讐への恐れからきている、ということによると思う。王の不品行はスコットランド社会への悪い手本になるという聖アンドルー教会の司祭のお説教 (II - ii - 37 ff.) もスコットランド貴族の離反も王の心には深く食い込まない。ただ "These stays and lets to pleasure plague my thoughts" (II - ii - 147) と考えるだけあるし、英国王の不興の恐れも結局 "say her father frown ... Let father frown and fret and die" と投げやりな調子で自分の頭から追いやってしまう。彼は自責の念に悩まされはするが、その描写も十分ではなくて、せいぜい死んだと信じている Dorothea の亡霊が "woe, woe to lust" と言いながら追いかけてくる (V- vi-34~) と打ち明ける位なので同情の念を呼びおこさない。

次にこの劇の女性の登場人物であるが、まず Ida についてみる。王の気持ちに読者(観客)が引き込まれない大きな理由のひとつに Ida もとても情熱に燃えているとは言いがたい性格だということがあげられる。Eustace との間をさかれて、王に言い寄られる時も "Then ... / Accept this ring wherein my heart is set" とか "The maid you fancy most will favour you" (IV - I - 19) と冷静に言うのみである。また、王、ひいては一般的に宮廷における軽佻浮薄な生活は嫌いだ、という発言が随所 (I - I - 112~114); The court is counted Venus' net II - I - 4 等)に見られるので彼女の思想は分かるが、どの発言も観念的なので人の心を揺り動かさない。次にこの劇の女主人公である Dorothea はとみれば、彼女の言うこと、即ち嘆きもお説教もこれ又非常に観念的である。自分を殺そうとする夫の陰謀と聞かされると、「見せかけの結婚は何の役に立とう、もっと身分が低かったら、このような目にあわないですむのに」と言って "to be great and happy -- these are twain (=two different things)" (III - iii - 76 ff.) とまとめてしまっているし、父である英国王に知らせたら、という Lady Anderson の提言にも "my husband is my lord and chief; These call me to compassion of his estate" (V - v - 70) とあくまで夫の立場への理屈の上からの理解を示すことを放棄しない。又、男装して逃げる Dorothea は逃亡の時の台詞も現実的で、"Since presence yields me death, and absence life, / Hence I will fly disguised -- like a squire" (「居残ると殺される。小姓のふりをして逃げよう」) (II - iii - 119) と言うだけである。シェイクスピアの 'As You Like It' の男装した Rosalind のように "In my heart / Lie there what hidden woman's fear there will / We'll have a smashing and marshal outside. I shall find in my heart to disgrace man's apparel to cry like a woman" 「女らしい恐れをかくして、外からはあらあらしい騎士のように見せかけよう。この身なりに恥をかかせても女らしく泣きたい」、という女らしい心のひだも、ましてや、それに加える皮肉、As many other mannish cowards have / That do outface it

with their semblances"「随分臆病な男たちもその見せ掛けで押しとおして
いますもの」(I - iii - end)という気のきいた台詞も一切言わない。

又、Dorotheaは観念的な上に実際のでもあるので、彼女に王の陰謀を告
げて、信じさせようとして、成功しなかった貴族たちが退出する時も "Will
you not stay? Then, lordings, fare you well." (II - ii - 101)と言だけ
だし、自分が森へ姿を消す時も "Friends, fare you well, keep secret my
depart." (III - iii - 127)と全く当然といえる、情景からいって秘密にされ
るべき事とわかっているのだから、冗長とも言える指示をしているのみであ
る。

最後に王と王妃が第5幕第1場で和解する時も、この劇では余り感動的で
ない。王はDorotheaが生きていたことを知って、自分のしたことを後悔し、
"how willingly I would weep … how glad I would submit, how firmly
I would sigh" (V - vi - 156～)と同じ内容のことを3通りに言う。この
こと自体は amplification という修辞学的方法の一つと思えるので伝統的で
目新しいものでないが、その他の所では自分の謝罪の気持ちを "pardon me"
とか "crave pardon" とか "forgive mine error" という言い方であらわして
いる。pardon は王妃に2度 (V-v-184,209), 王妃の父に対して1度 (185),
Cuthbert に対して1度 (206), forgive mine error は王妃に対して1度使っ
ている。このように同じような平凡な言葉を同一場面で繰り返すことはエリ
ザベス朝のパラエターに富んだ表現の芝居が台頭して来る時に少し単調す
ぎるのではないだろうか。後悔というものはそのように簡単に口に出せるも
のではなく、もし出すとしたら自殺しかねないほどの激しさをもって、自己
を突き刺すものだと思う。その点、死を決意した Othello の "Whip me, ye
devils; Blow me about in window; Roast me in sulphur; Wash me in
steep-down gulfs of liquid fire" (V-ii) というような台詞は激しい。この
劇はいくらハッピーエンド物とはいえ、その何分の一かの表現があってよい
ように思う。ハッピーエンドといえば前述の Angelica と (正気に戻って) 結
婚できる Orlando も Iphegenia と結婚できることになった Alphonsus も

"Thanks"を前者は2回、後者は1回使っている。こういう状況にこのような表現をまづもってきたグリーンの常套手段は少し平凡であるといえるだろう。

エリザベス朝は先に述べた Marlowe の *Tamberlaine* に見られるようにすでに壮大な愛の表現が行われていた時代である。時には詭弁といえるような方法で男女の愛をあらわしもしている。例をもうひとつ加えれば、死んだ Zenocrate に対して Tamberlaine は恋しくて、"Though she be dead, yet let me think she lives :/ And feed my mind that dies for want of her." (第2部 II - iv - 7)「彼女は死んでいても、生きていると思わせてくれ。そして彼女がいないことによって死にそうになっている私の心を救ってくれ」とわざと堂々巡りの理屈で未練の情を表しているし、こういう表現の伝統は1592年に死んだ Sir Philip Sidney もすでに "Sonnet" で "That in my woes for thee thou art my joy, / And in my joyes for thee my only annoy." (Sonnet 108)「あなた故の私の悲哀の中で、あなたは私のよろこびとなり、あなた故の私のよろこびの中で私の唯一の悩みとなる」というふうに自分の恋心をあらわしている。ここでみてきたようなグリーンを書く主人公の台詞の曲のなさはロマンス物としては既に古く insipid な感じを当時としても与えたのではないかという気がしている。

註

- 1 当該の作品は *The Revels Plays*, gen. ed. Clifford Leech., (ed. by Norman Sanders, Methuen and Co., London, repr.) に収められている。本論文中の引用はここからのものである。
- 2 このシリーズの中の他の話は William Painter の *Palace of Pleasure* (1566-7) に取り入れられている。又、Shakespeare の *Othello*, *Measure for Measure* に部分的にはあるが、挿話が取り入れられている。*The Revels Plays*, p. xxix-xxxv.

3 Nethercot, Arthur H., et. al. eds., *Elizabethan Plays*, Holt, Rinehart and Winston, Inc., London, 1971.